

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第5集

羽黒平(3)遺跡発掘〔試掘〕調査報告書



1995年3月31日
浪 岡 町

例 言

- 1 本報告書は、浪岡町が進める「美人川再生事業」に係わり、1994年7月から1995年3月まで実施した羽黒平(3)遺跡の試掘調査の報告書である。
- 2 本書の編集・執筆は、浪岡町教育委員会から発掘担当者を依頼された工藤清泰（浪岡町史編纂室主査）がおこなった。
- 3 本書を作成するにあたり、以下の方々と機関からご指導ご助言を賜った。記して感謝申し上げる次第です。

弘前大学教授・村越深氏、青森県立郷土館学芸課長補佐・成田誠治氏、同学芸課主任学芸員・福田友之氏、青森県埋蔵文化財調査センター課長・鈴木克彦氏、板柳高等学校教諭・山口義伸氏、青森県教育庁文化課、青森県埋蔵文化財調査センター

目 次

表紙・裏 縄文晩期朱塗り楕円形皿形土器

例言

I. 調査にいたる経緯	1
II. 調査の経過	2
III. 基本層序と検出遺構	4
IV. 出土遺物	13
V. 調査成果のまとめ	20
図1 遺跡の位置・図2 遺跡の地形・表紙裏	
図3 グリッド配置図	3
図4 遺構と基本層序(1)	5
図5 遺構と基本層序(2)	6
図6 S I 02実測図	8
図7 S I 03実測図	9
図8 S X 02実測図	11
図9 I・J-8区実測図	12
図10 出土遺物実測図(1)	14
図11 出土遺物実測図(2)	15
図12 出土遺物実測図(3)	16

図13 出土遺物実測図(4)	17
図14 出土遺物実測図(5)	18
写真1 検出遺構と遺物出土状態(1)	21
写真2 検出遺構と遺物出土状態(2)	22
写真3 検出遺構と出土遺物	23
写真4 出土遺物(1)	24
写真5 出土遺物(2)	25
写真6 出土遺物(3)	26
写真7 発掘の状況(1)	28
写真8 発掘の状況(2)	29
表1 石器・石製品等計測表	27



I 調査にいたる経緯

浪岡町には国史跡浪岡城跡をはじめとする、多くの埋蔵文化財包蔵地が所在し、町づくりのキャッチフレーズを「中世の里」とするなど、歴史的遺産がいたるところに存在する。今回調査対象となった羽黒平(3)遺跡に関しても、今回の調査地である丘陵上から浪岡川よりに一段低くなる河川氾濫原の現水田地については、昭和32年頃に町の有識者によって発掘調査がなされ、昭和33年1月から5月までの「広報行丘」にて計4回にわたって発掘調査の写真や出土遺物の写真が掲載されている。現在残されている遺物などをみると、縄文晩期大洞C1式を中心とする泥炭地遺跡であったと推定される。

なお、調査地に接する羽黒神社は「美人川伝説」の擬定地であるとともに30年以上前に湧き水の池から龍神が現れたという伝承をもつ神社であり、現在境内には龍神様・十和田様・山の神様・二十三夜様・羽黒権現様が祭られており、毎年4月19日には祭礼日となり、毎月19日には近隣の人々が参拝に訪れている。本調査にあたっては、そのような歴史的経緯を考慮して、縄文晩期を中心とする遺構・遺物発見に努めるよう以下の発掘【試掘】調査要項によって実施することとなった。

羽黒平(3)遺跡発掘【試掘】調査要項

1 調査の目的

中世初期に時代認定できる伝説「美人川と炭焼藤太」の擬定地である羽黒神社周辺は豊富な文化財が存在し、県立郷土館収蔵の「風韻堂コレクション」所収の考古学資料や町指定考古学資料「立ち膝をする土偶」及び天然記念物的価値のある楊枝杉の存在はその資料価値を示す事例でもある。今回浪岡町は、まちづくりの主要施策である『中世の里』づくりの一環として「美人川再生事業」を計画したところ、その対象地に羽黒平(3)遺跡が存在し埋蔵文化財に影響を及ぼす状況が発生した。

そのため、浪岡町は文化財保護の立場から緊急に試掘調査を実施して記録保存するとともに今後の事業計画に対する参考資料を提示するために調査を行うものである。

2 調査対象地と面積

調査対象地 浪岡町大字五本松字羽黒平10-1
他

調査面積 350平方メートル（実質613平方メートル）

3 調査期間

事前調査 平成6年6月20日から7月15日まで
発掘【試掘】調査 平成6年7月18日から9月16日まで（予定）（実質10月18日まで）

整理作業 平成6年9月19日から平成7年3月20日まで

4 調査体制

①調査主体者

浪岡町長 阿部暢彦

②調査顧問

成田誠治（青森県立郷土館学芸課長補佐）

③調査事務局

浪岡町教育委員会教育長 蝦名俊吉

生涯学習課長 西塚幸一

生涯学習課文化班長 石岡まつ

生涯学習課文化班主事 木村浩一

浪岡町役場企画課長 福上芳巳

浪岡町企画課主任主査 山内幸博

④調査担当者

浪岡町史編纂室主査 工藤清泰

⑤調査補助員等

調査補助員（浪岡町臨時職員）

齋藤とも子・金崎友子

調査協力員 弘前大学教養部学生

調査作業員（浪岡町シルバー人材センター）

太田栄・雪田美信・佐山勇雄・岩崎竹次郎・若林弘・平井つるゑ・山内みつゑ・菊池さな・山田アエ・兼平ツエ・佐藤レオエ・佐藤イサ

5 調査方法

本年度は、遺構・遺物の分布がどのようになっているのかを中心にグリッド設定した調査対象地をトレンチ状に調査し、「美人川再生事業」の参考とするため試験的調査を実施する。

羽黒平(3)遺跡は、羽黒神社を中心に丘陵上とその下に存在する泥炭地の遺物包含層からなる縄文時代晩期の遺跡である。これまでの出土遺物を見ると縄文時代晩期前半のいわゆる亀ヶ岡式土器・土偶を中心に各種の石器も見られる。今回の調査対象地である丘陵上端では当然住居跡やそれに付随する各遺構の検出が予想されるので、その点を吟味しながら調査する必要がある。

6 調査報告書の刊行

浪岡町教育委員会から依頼を受けた調査担当者が本年度中に刊行する。

II 調査の経過

平成6年

4月22日 町から教育委員会に発掘調査依頼の提出。

4月25日 文化庁長官宛埋蔵文化財発掘通知進達。

5月24日 発掘担当依頼を受ける。

5月31日 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知あり。

7月11日 現場の草刈り開始。

7月12日 グリッド設定(図3グリッド配置図参照)。グリッドの南北線は磁北より26°西側に振れており、1グリッドの大きさは10m×10mとなっている。

7月13日 プレハブ設置、作業用具搬入、トイレ、テントの設営。

7月14日 現況測量(平板1/200)。

7月18日 表土剥ぎ開始。F6、7、8、9区、G8区。有孔石製品・石剣片・異形石製品・円盤状石製品等が出土する。

7月19日 基本層序確認のため前日の表土除去部

分を黄褐色土まで掘り下げる。

7月20日 F7区第II層上面から土器・石器フレークが集中出土。I8区を素掘りすると朱塗り土器・石鏃等出土。

7月21日 H7、8、9、10区の表土除去開始。F7区から翡翠玉や石鏃出土。

7月22日 H10区SX02より朱塗り土器・磨消縄文土器・粗製深鉢出土。F8区SX01土器出土。H7区土器出土範囲あり。I8区弘前大学学生素掘り。

7月25日 H7、8、9、10区地山まで掘り下げ。SX02から炭化物の出土が顕著。

7月26日 H、I、J8区表土除去。H7区の土器包含層から3点取り上げ。SX02プラン確認。

7月27日 H、I、J8区、H7区掘り下げ。

7月28日 I8区から住居跡確認(SI02)。H8区から埋設土器(SX06)出土。D、E8区表土除去作業。

7月29日 SX02、SX06掘り下げ。H、I7区、D、E8区掘り下げ。

8月1日 C8、9区掘り下げ。SX02を掘り下げると覆土から擋鉢状に分布する火山灰検出。(後に白頭山苫小牧火山灰と判明)C8、9区から遺物はほとんど出ない。F7区から石器フレークの出土多し。

8月2日 J8区SI03のプラン確認作業。

8月3日 SI02・SI03のプラン確認。SX02の床面を確認。

8月4日 SI03掘り下げ開始。SX02炭化材の検出作業。C7区掘り下げ。

8月5日 SI02掘り下げ開始。SX02と同様の火山灰を覆土上層で検出。SX03・SX05・SD04の掘り下げ始める。

8月8日 SI02は西側の壁面が明確に検出できず。SI03セクション実測。SD04はSI02・SI03より新しい構築を確認。

8月9日 SI03完掘状況。

至浪岡

至青森空港

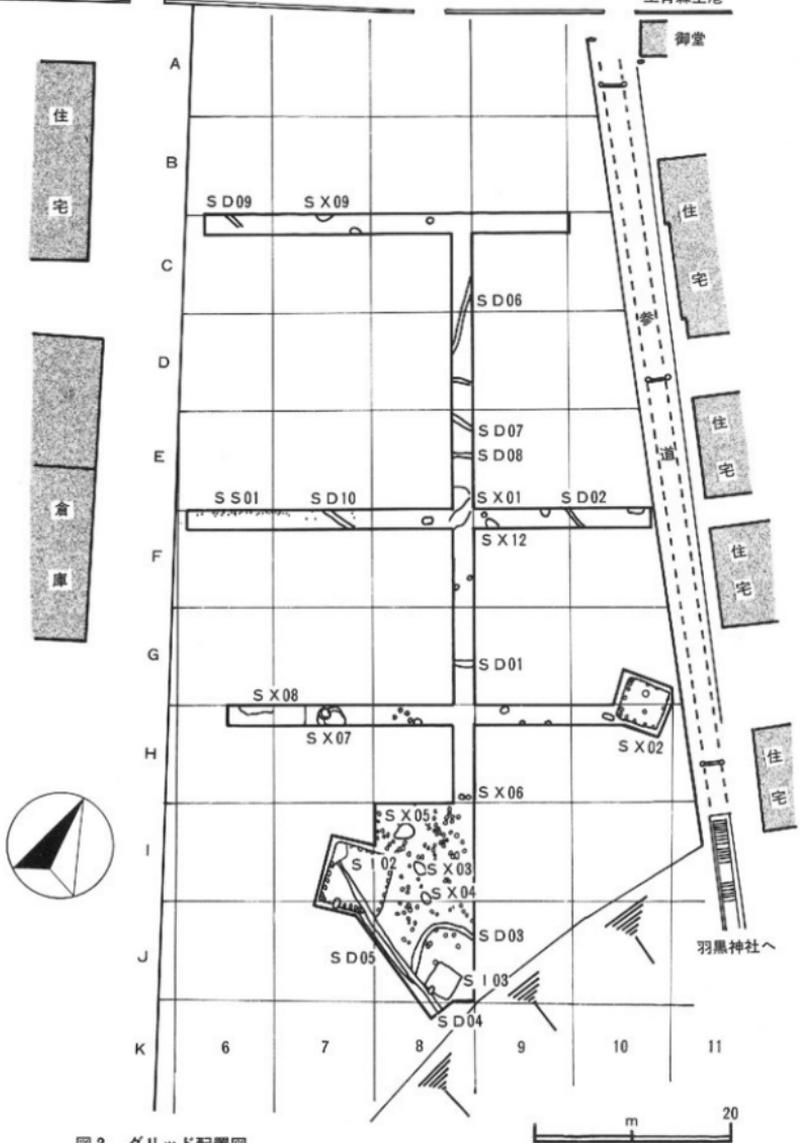


図3 グリッド配置図

8月10日 C6, F6, H6掘り下げ。S I02から炭化した壁柱を確認。S D03覆土から中国製染付碗の破片を検出。

8月11日 S I02は焼土残存部まで掘り下げ。S D03・S D04完掘。H7区S X07から縄文晩期の壺・朱塗り皿形土器が出土。S I01を掘り下げても単なる攪乱で住居跡にはならず。

8月12日 S I02・S X02掘り下げ。S X07から朱塗り楕円皿形土器が出土。

8月22日 トレンチ部分の層序把握のため壁面の精査。S I03実測開始。

8月23日 S I03かまどセクション実測。E, F5区より集石遺構検出(S S01)。S X02を北側に拡張して掘り下げる。S D05完掘。S I02セクション精査。S X07遺物取り上げ。

8月24日 S X07から朱塗り皿形土器がほぼ完形で出土。C6区地山まで掘り下げ。

8月25日 S X07・S X08完掘。I7, J7, I8, J8区から検出された柱穴を掘り下げる。S I02セクション実測。S I03かまど実測。

8月26日 S I02床面から盤状土製品出土。S I03かまど実測。S X01・S X02掘り下げ。I8区柱穴覆土から炭化したクリ・クルミの遺存体検出。

8月29日 S X02掘り下げ、南壁セクション実測。S I02精査・実測。

8月30日 S X02・S I02・S I03実測精査。I8区柱穴掘り下げ。

9月1日 S I03完掘。S I02・S X02実測精査。

9月2日 S D09・S D10・S X13完掘。S X02・S I02実測精査。発掘区の精査、写真撮影。

9月5日から10月18日まで層序セクション実測及び遺構実測を行う。

10月19日から11月4日まで遺物の洗浄作業。

11月5日から平成7年3月20日まで報告書作成作業。

III 基本層序と検出遺構

本調査区の基本層序は表土から遺構確認面及び地山までI層からIV層までとなっている。しかし、これは現地形の層序そのものではなく表土層が重機によって大部分取り除かれた状況以後の層序であり、調査区内に現地形の層序を明確に残す部分は少ない。すなわち、

I層 黒褐色土(10YR2/2)、この土層から掘り込まれた遺構は現代のものが多い。

II層 黒色土(10YR2/1)、この土層から掘り込まれた遺構は平安・縄文時代のものが多い。

III層 暗褐色土(10YR3/3)に黒色土(10YR2/1)を3%含む混層、II層が欠落している層序の部分では平安・縄文時代の遺構確認面となる。

IV層 地山・明褐色土(7.5YR5/6)。

となっており、他に遺構などの構築に伴って各種の間層が入り込むものの基本層序のI層からIV層の上層のバリエーションをはみ出るものではない。また、平安時代の堅穴住居跡覆土には白頭山苫小牧火山灰と推定される火山灰の検出が顕著であったことから、およその廃絶時期を推定できる状況にある。

A) 縄文時代の遺構

縄文時代晩期の遺構としては以下のものがみられた。

S X01 F8区北側を中心に検出した不正形な土坑。(図4・5)

S X05 I8区検出の不正形土坑。(図9)

S X06 H6区検出の埋設土器。(写真1-④⑤、図4)

S X07 H7区検出の上器・石器廃棄土坑。(写真1-②、図4)

S X09 C7区検出の円形土坑。

S X13 E8区検出の不正形土坑。

S D02 F9, 10区検出の溝跡。

S D06 C, D8区検出の溝跡。

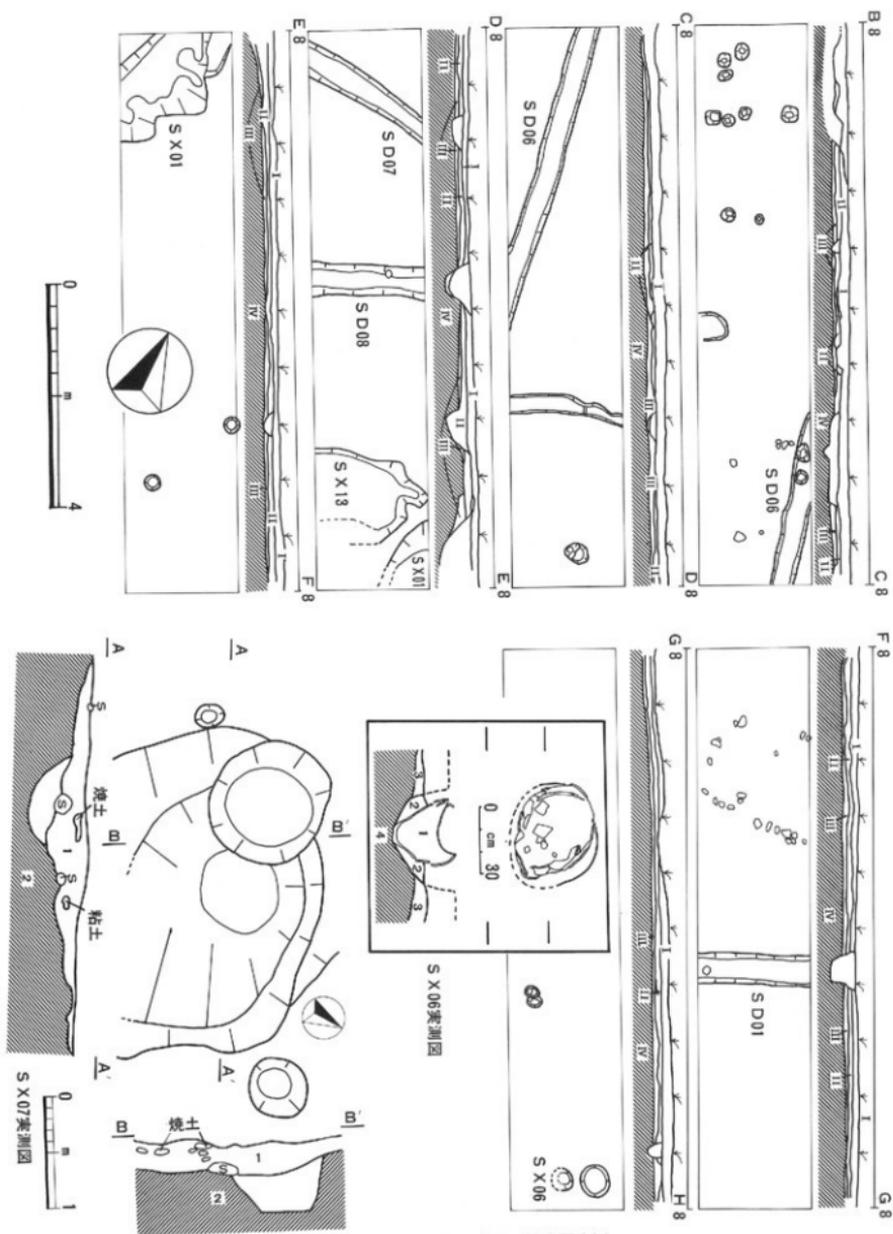


図4 遺構と水路(1)

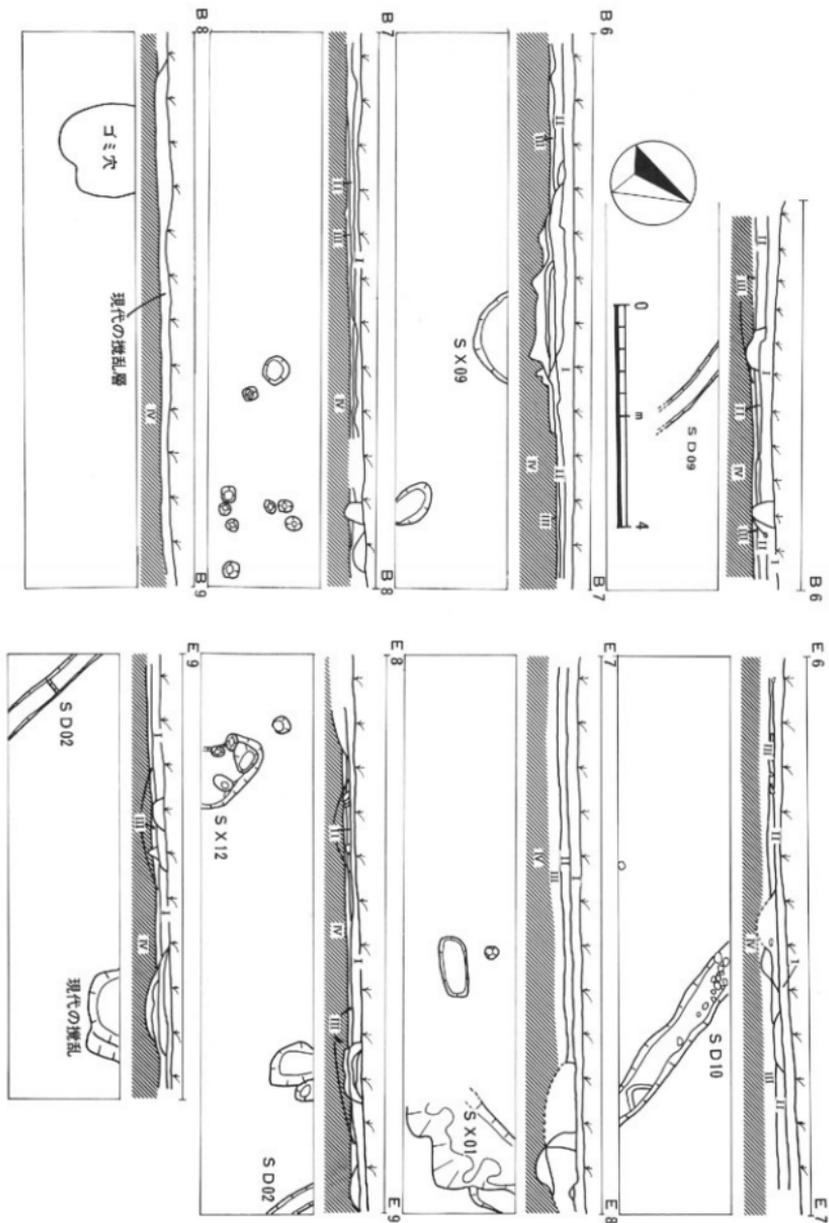


図5 遺構と基本層序(2)

SD07 E8区検出の溝跡。

SD09 C6区検出の溝跡。

SD10 F7区検出の溝跡。

SS01 F6、7区検出の集石遺構。

B) 平安時代の遺構

明確に平安時代と認定できる遺構は以下の住居跡3軒があった。

SI02 I・J、7・8区から検出した竪穴住居跡。(写真2-②③⑤、図6)

SI03 J8区から検出した竪穴住居跡。(写真3-①②、図7)

SX02 G、H10区から検出した竪穴住居跡。(写真3-③、図8)

C) 平安時代以降の遺構

平安時代以降の遺構としては、遺構間の重複関係と基本層序における掘り込みラインを参考にし、以下の遺構を確認できる。

SD01 G8区検出の溝跡。現代か？

SD03 K8区検出の弧状の溝跡。中国製染付の出土から16世紀以降。

SD04 I、J、K7、8区検出の溝跡。

SD05 I、J7、8区検出の溝跡。

SD08 E8区検出の溝跡。現代か？

SX08 H6区検出の現代の掘乱。

なお、I、J8区から検出されている不正形な掘り込みを呈するSX03とSX04は縄文時代あるいは平安時代のいずれかと推定されるが出土遺物等が見られず時代認定は難しい。また、同区から多数検出された柱穴についても、縄文時代と平安時代の双方の可能性が存在するため、今回は図面提示のみとし、考察は控えたい。

D) 主な遺構の概略

SX06 H6区検出の埋設土器(写真1-④⑤、図4)。器高32cmの深鉢形土器を正立状態で埋設したもので、ほぼ完形に近い状態である。円形の掘り込みはおそらくII層であったと推定されるが、掘りすぎのため確認の段階ではIII層以降である。

断面の層序は以下の通りである。

SX06層序注記(図4に対応)

1 黒褐色土(10YR2/3)に明黄褐色土(10YR6/8)を小粒状に2%炭化物を1%含む混層

2 黒褐色土(10YR1/3)に明黄褐色土(10YR6/8)を小粒状に5%含む混層

3 黒褐色土(10YR1/3)に明黄褐色土(10YR6/8)を30%含む混層

4 地山・明黄褐色土(10YR6/8)

SX07 H7区検出の土器・石器廃棄土坑(写真1-②、図4)。不正形播鉢状の掘り込みを呈し、トレンチの南側に本遺構は拡張される。覆土はほとんど単一の状況を呈し、以下の注記である。

SX07層序注記(図4対応)

1 黒褐色土(10YR2/2)に粒子状の明黄褐色土(10YR6/8)と炭化物をそれぞれ5%ずつ含む混層、しまりなく粘土ブロックと焼土ブロックをそれぞれ7%程度含む

2 地山・明黄褐色土(10YR6/8)

本遺構からの出土遺物は多種多様であり、最下層から出土した朱塗り楕円形皿形土器(表紙写真、写真1-⑥、写真4-④、図10-1)をはじめ朱塗り土器は皿形(写真5-①、図10-7)・碗形(写真5-②③、図10-2・5)・台付土器(写真4-⑥、図10-3)があり、他に変形(写真4-③、図10-6)・深鉢形・鉢形等がある。石器としては、翡翠玉(写真6-23)磨製石斧(写真6-20)石鏃(写真6-16)石匙(写真6-2)等があり、クリ等の堅果類が炭化した状態で出土している。

SI02(写真2-②③⑤、図6)I・J、7・8区から検出した竪穴住居跡で、南北630cm東西630cmのほぼ正方形の掘り方を呈し、南側にかまどを有する。覆土は、本遺構を切って構築されているSD04・SD05の溝以外は一律に埋められた層序になっており、床面も掘り方後に貼って居る状況が認められる。層序注記は以下の通りである。

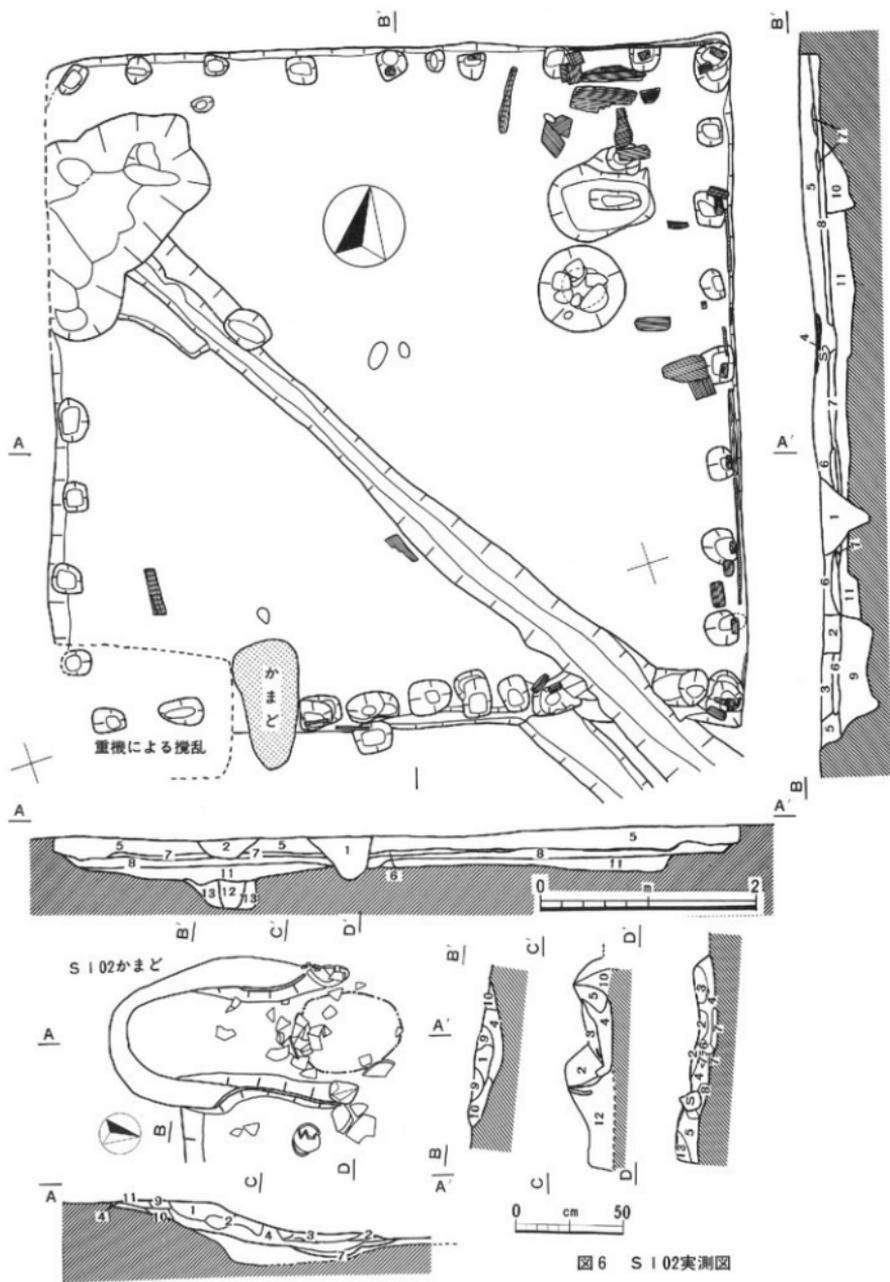
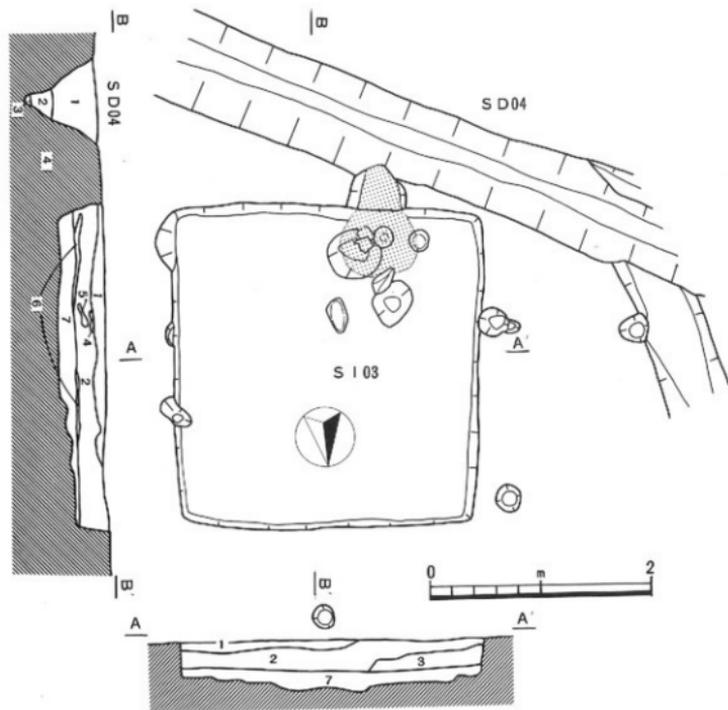


図6 S102実測図



S 103層序注記

- 1 黒褐色土 (10YR 2/3) に明黄褐色土 (10YR 7/6) を極小粒から中粒状に5%炭化物を小粒状に1%含む混層
- 2 黒褐色土 (10YR 2/3) に明黄褐色土 (10YR 6/8) を極小から極大粒状に10%炭化物を小粒状に3%含む混層
- 3 黒褐色土 (10YR 2/3) に明黄褐色土 (10YR 6/8) を小から極大粒状に5%含む混層
- 4 明褐色焼土 (7.5YR 5/8)
- 5 黒褐色土 (2.5Y 3/2)、粘土質
- 6 黒色土 (10YR 2/1)
- 7 明褐色土 (7.5YR 5/8) に暗褐色土 (10YR 3/4) を2%含む混層、しまり強い

SD04層序注記

- 1 黒褐色土 (10YR 2/3) に黄褐色土 (10YR 7/8) を極小粒から大粒状に3%含む混層
- 2 暗褐色土 (10YR 3/3) に黄褐色土 (10YR 7/8) を極小粒から中粒状に20%含む混層
- 3 明黄褐色土 (10YR 6/6)
- 4 地山・明黄褐色土 (10YR 6/8)

S 103かまど注記

- 1 褐色土 (7.5YR 4/4) に小粒状の炭化物を1%含む
- 2 褐色焼土 (7.5YR 4/6) に極暗褐色土 (7.5YR 2/3) を3%炭化物を1%含む混層
- 3 橙色焼土 (7.5YR 6/8)
- 4 褐色焼土 (7.5YR 4/6)
- 5 黄褐色土 (10YR 5/6)、焼土か?
- 6 暗褐色土 (10YR 3/4) に明黄褐色土 (10YR 6/8) を小から大粒状に10%含む混層
- 7 黒褐色土 (7.5YR 2/2) に明黄褐色土 (10YR 6/8) を小から大粒状に7%含む混層

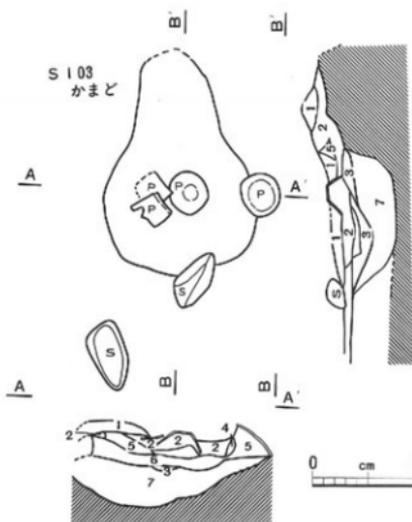


図7 S 103・他実測図

SI02層序注記

- 1 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色土(10YR6/6)を小・中粒状に2%含む混層(SD04覆土)
- 2 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色土(10YR2/6)を小・中粒状に1%炭化物を下層に1%含む混層
- 3 暗褐色土(10YR3/3)に明黄褐色土(10YR6/6)小・極大粒状に30%炭化物を3%含む混層、しまり有り
- 4 暗褐色土(10YR3/3)に浅黄橙色灰(白頭山苦小牧火山灰・10YR8/4)を10%含む、しまりなし
- 5 黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色土(10YR6/6)を小・極大粒状に10%炭化物を1%上層部に白頭山苦小牧火山灰を3%含む混層。
- 6 明褐色焼土(7.5YR5/8)に浅黄橙色土(10YR8/4)を大粒状に1%炭化物を5%含む混層
- 7 黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色焼土(7.5YR4/6)を小・大粒状に2%明黄褐色土(10YR6/6)を小・大粒状に3%含む混層
- 8 黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色土(10YR6/6)を小・極大粒状に10%含む混層
- 9 明黄褐色土(10YR6/6)に黒色土(7.5YR2/1)を50%含む混層
- 10 明黄褐色土(10YR6/6)に黒色土(7.5YR2/1)を40%含む混層
- 11 明黄褐色土(10YR6/6)に黒色土(7.5YR2/1)を30%含む混層
- 12 明黄褐色土(10YR6/6)に黒色土(7.5YR2/1)を10%含む混層
- 13 明黄褐色土(10YR6/6)、しまりなし

SI02 かまど注記

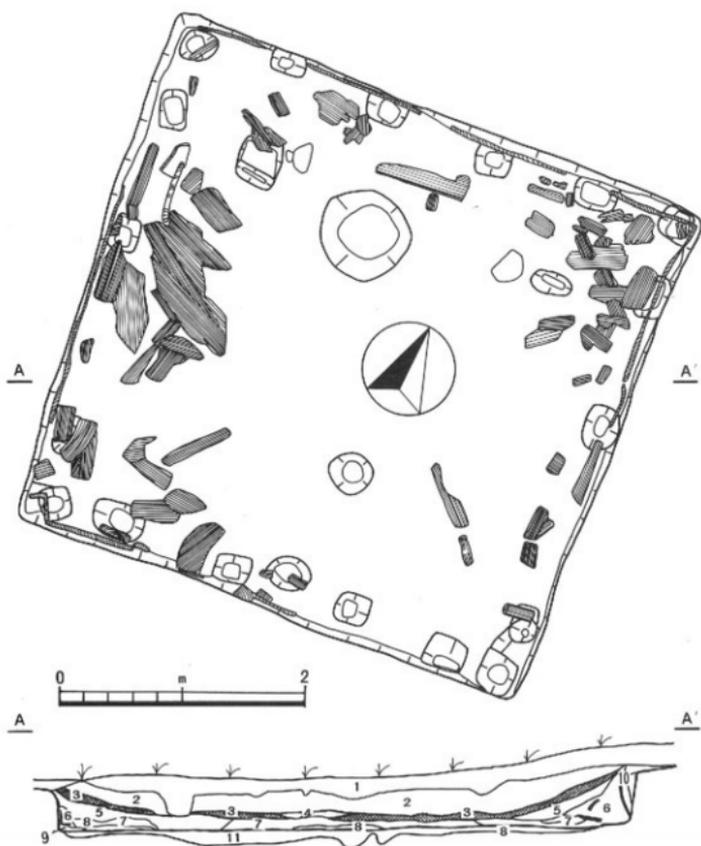
- 1 褐色粘土(10YR4/6)、しまり強い
- 2 暗赤褐色焼土(5YR3/6)
- 3 赤褐色粘土(5YR4/6)

- 4 極暗褐色土(7.5YR2/3)に橙色土(7.5YR6/8)を5%炭化物2%を含む混層
- 5 暗赤褐色焼土(2.5YR3/6)、しまり強い
- 6 黒色土(7.5YR2/1)
- 7 明赤褐色焼土(5YR5/6)
- 8 にぶい褐色粘土(7.5YR5/4)
- 9 暗褐色土(7.5YR5/6)に極暗褐色焼土(5YR2/4)を30%含む混層
- 10 明褐色粘土(7.5YR5/6)
- 11 暗褐色土(7.5YR3/4)に極暗褐色焼土(5YR2/4)を10%含む混層
- 12 明赤褐色焼土(5YR5/8)に明黄褐色土(10YR6/8)を7%暗灰黄色粘土(2.5YR4/2)を3%黒色土(10YR1.7/1)を1%含む混層
- 13 赤褐色焼土(5YR4/6)に炭化物を3%含む

柱穴は壁面に並ぶものだけが検出され、明瞭に残る東壁・北壁では隅から隅まで9個存在している。特に東壁は炭化材の検出も有り、柱穴と壁の間に横位になった板材の痕跡も認められる。かまどは南壁西側に位置し、南に煙道有して袖の部分に土師器甕を充填していた。

出土遺物としては、覆土から縄文時代晩期の上器片が多量に出土した他、小型甕(写真3-⑧、図14-8)と壺形土製品(写真5-④、図14-10)が床面直上から出土、須恵器壺形の破片が覆土から1点出土している。

SI03 (写真3-①②、図7)J8区から検出した竪穴住居跡で東西275cm南北290cmの方形プランを呈している。覆土は人為的埋め戻しと推定され、床面直上に若干の黒色土分布が認められた。かまどは南壁西側に位置し、接近して大型の河原石が存在することからかまどに使用していた可能性を有し、南に煙道を出していたと推定される。柱穴は確認できず、貼り床の痕跡が明瞭である。出土遺物はかまどだけからであり土師器甕(写真3-



S X 02層序注記

- 1 黒褐色土 (10Y R 2/2) に明黄褐色土 (10Y R 6/8) を小粒状に1%含む混層
- 2 黒褐色土 (10Y R 2/3) に明黄褐色土 (10Y R 6/8) を小・中粒状に3%炭化物を2%含む混層
- 3 暗褐色土 (10Y R 3/4) に白頭山苫小牧火山灰を40%炭化物を1%含む混層
- 4 黒褐色土 (10Y R 3/2) に白頭山苫小牧火山灰を5%明赤褐色焼土 (5Y R 5/8) を中粒状に1%炭化物を1%含む混層
- 5 黒褐色土 (10Y R 2/3) に明黄褐色土 (10Y R 6/8) を小・極大粒状に10%炭化物を2%含む混層
- 6 黒褐色土 (10Y R 2/3) に明黄褐色土 (10Y R 6/8) を小・大塊状に30%炭化物を10%含む混層
- 7 明赤褐色焼土 (5Y R 5/8) に黒褐色土 (10Y R 2/3) を10%炭化物を3%含む混層
- 8 黒褐色土 (10Y R 2/3) に明赤褐色焼土 (5Y R 5/8) 小・中粒状に2%炭化物を5%含む混層
- 9 灰白色粘土 (10Y R 7/1) に黒褐色土 (10Y R 2/3) を20%含む混層
- 10 明黄褐色土 (10Y R 6/8) に黒褐色土 (10Y R 2/3) を3%含む混層
- 11 黄褐色土 (10Y R 5/8) が40%明黄褐色土 (10Y R 6/6) を30%黒褐色土 (10Y R 2/1) が30%の混層

図8 S X 02実測図



图9 I·J-8区实测图

①②、図14-3）・锅底（写真3-⑤、図14-5）の破片がある。S D04溝（新）が重複している。

S X02（写真3-③、図8）G、H10区から検出した竪穴住居跡で東西450cm南北430cmの方形プランを呈する。覆土中層には白頭山苦小牧火山灰を多量に含む層が楕円状に分布し下層から須恵器の破片が3点出土している。床上上層には全域に亘って炭化物が見られ焼失家屋と考えることができる。柱穴は壁面に隣接して並び、南壁北壁が6個東壁西壁5個確認でき、柱と壁面の間に横位になった板材が組み込まれていた状況を推定できる。炭化物の一部には、茅も混じっていることから屋根葺きには茅を使用していたと思われる。

出土遺物は、覆土から多量の縄文晩期土器片や土偶片（写真6-24、図13-9）がある割に、平安時代の遺物は土師器裏破片と同坏片（写真3-⑦、図14-6）と前述の須恵器片が存在するぐらいで数量は少ない。

IV 出土遺物

本試掘調査によって出土した遺物は、表採資料を含めてダンボール箱5・6箱程度である。その大部分は縄文時代の土器片であるが、重機による地表の改変がなされていたため細片が主であり、復原できる（実測によって復原できる）資料は20個体前後と推定される。完形品は唯一表紙を飾った朱塗り楕円形皿形土器のみであり、他は図上復原のものが大半である。また、石器・石製品は一括品の中に入っていたものを加えても40点前後であり、総量は少ない。土製品も土偶の破片が1点あるのみである。

平安時代の土師器・須恵品・盤状土製品は、ほとんどが竪穴住居跡の覆土・床面・かまどからの出土であり、完形品は1点も存在しない。住居跡の覆土からは縄文晩期の土器片等が多量に充塞していたため、当初掘り始めの段階では縄文時代の住居跡と誤認する状況でもあった。

また、中世の資料として中国製染付碗の破片が出土したことは、当地における没岡城を主体とする16世紀段階の遺跡の広がりを確認できたことでも意義深いものがある。以下、時代ごとに出土遺物を記述してゆが、今回の報告にあたっては頁数の制限もありすべての資料を網羅できる状況ではなかったことから、概要であることをお断りし、本発掘の段階の報告書で遺物の全容が提示できることを期する次第である。

A) 縄文時代の遺物

1) 土器

縄文時代の土器としては、一部円筒式土器らしい細片も出土しているが、縄文晩期大洞C1式から大洞C2式期のものがほとんどである。器形としては、深鉢形、浅鉢形、台付浅鉢形、片口浅鉢形、壺形、皿形、碗形、注口形、香炉形、等があり、精製土器は壺形、皿形、碗形、注口形、香炉形に多く、朱塗りの製品が多いという特徴が存在する。

深鉢形 出土した土器破片の中では最も多いが、個体数は底部片の数から20前後と推定される。特にH8区S X06とした埋設土器（写真4-①、図11-3）は、器高32cm幅26.5cmを計り、唯一全体形が理解できる資料である。口縁に一個の突起を有し、口縁部外面に二条の沈線、外面は幅広の単節捺糸文を縦位と横位に充填している。他に埋設土器と考えられる深鉢形土器はJ8区にて2点ほど検出されたものの、重機による破壊が激しく、底部上端が若干残る程度であった。また、外面に捺痕文のある資料（図11-8）も存在する。

浅鉢形 浅鉢形は写真や実測図で紹介はできなかったものの、数点出土している。

台付浅鉢形 台付浅鉢形土器も復原可能な土器は5個体ぐらい出土している。図11-2で示したものが唯一提示できた資料である。器高15cm幅15cmを計り、口縁には突起帯、口縁部くびれ外面には沈線の中に刺突状の列点文が巡り、胴部と台部下半の底部外面には単節捺糸文が斜行して施されて

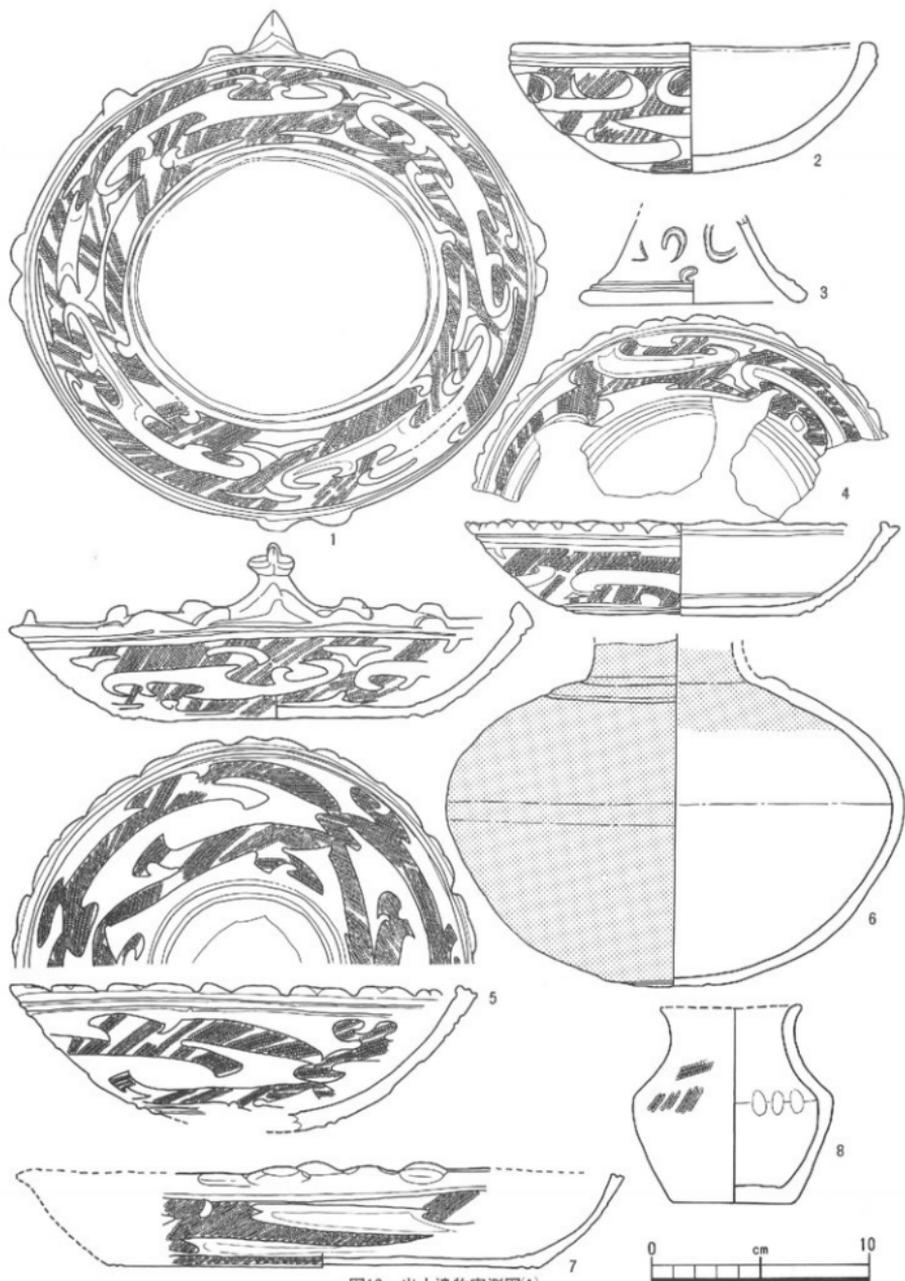


图10 出土物实测图(1)

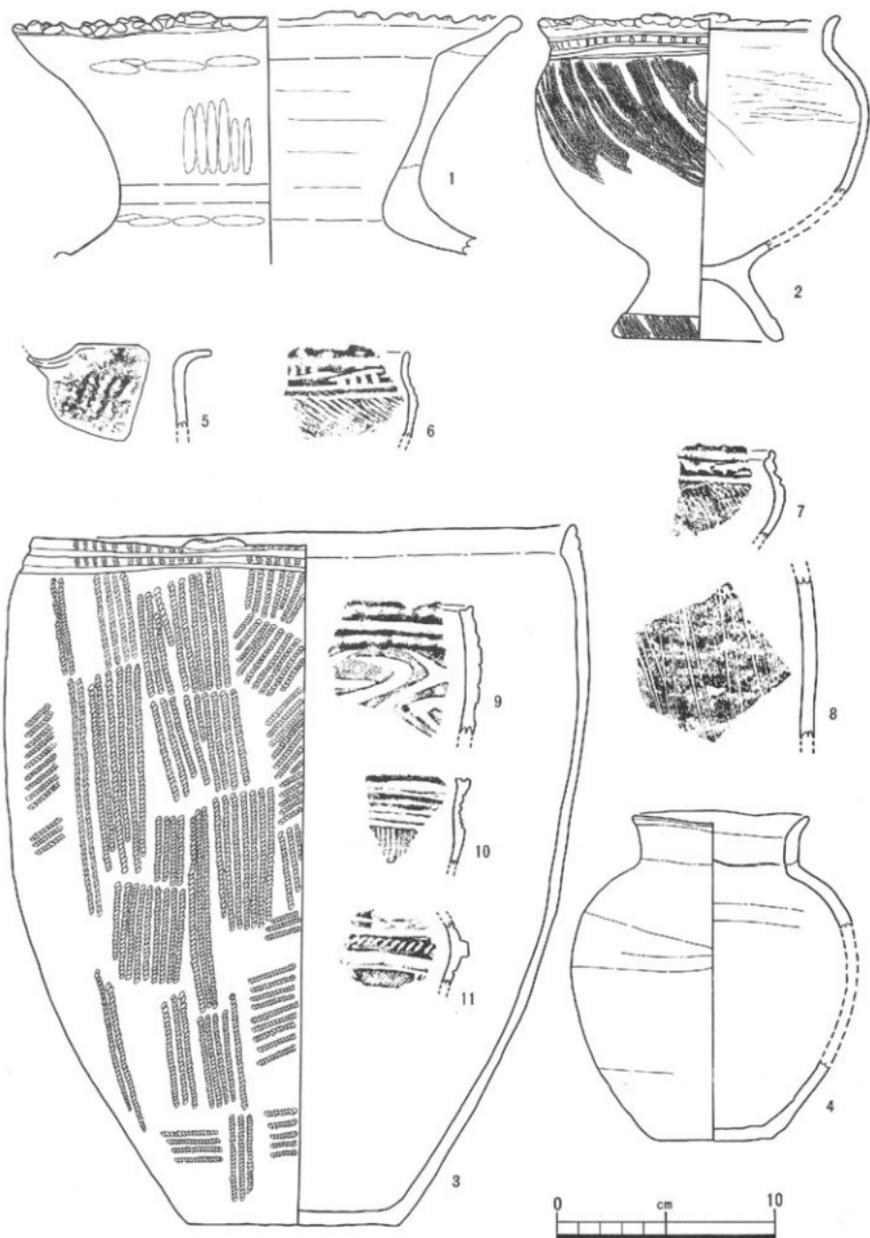


图11 出土遺物実測図(2)

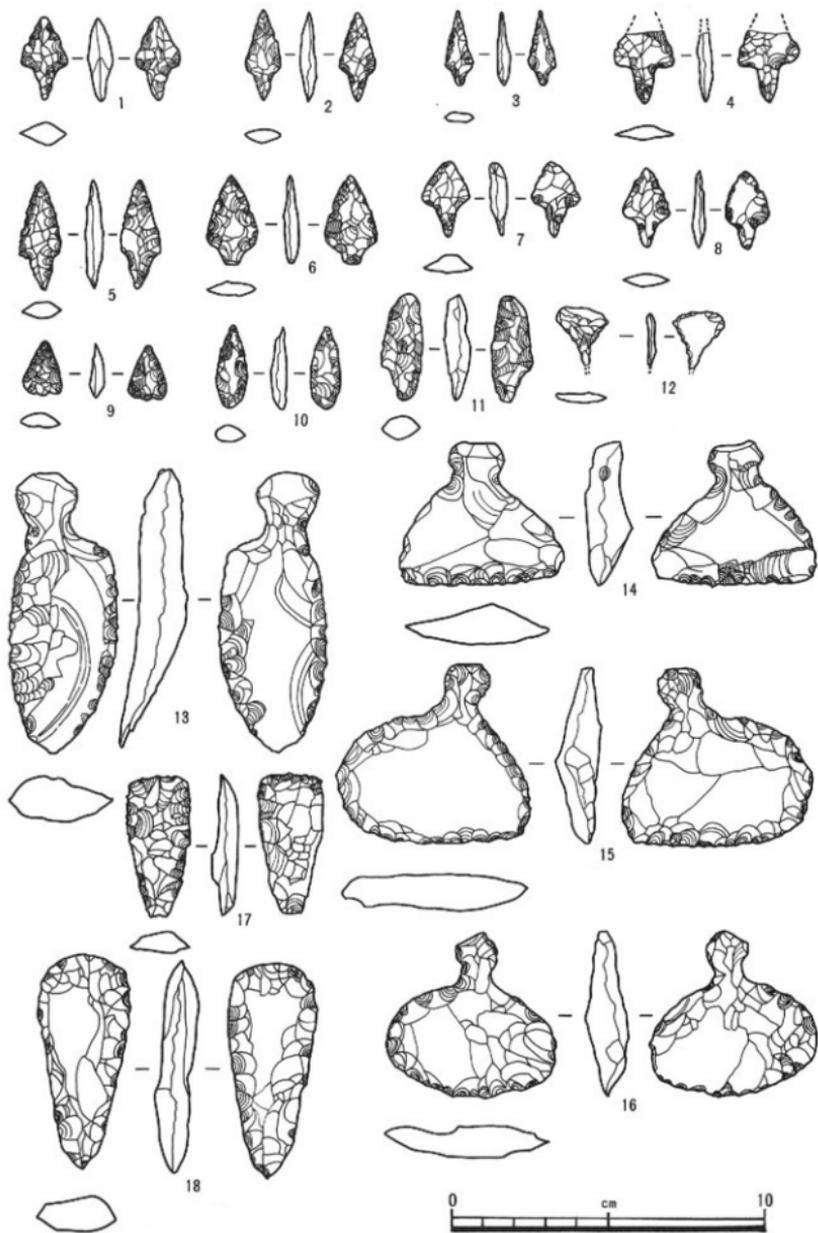


图12 出土遗物实测图(3)



图13 出土遗物实测图(4)

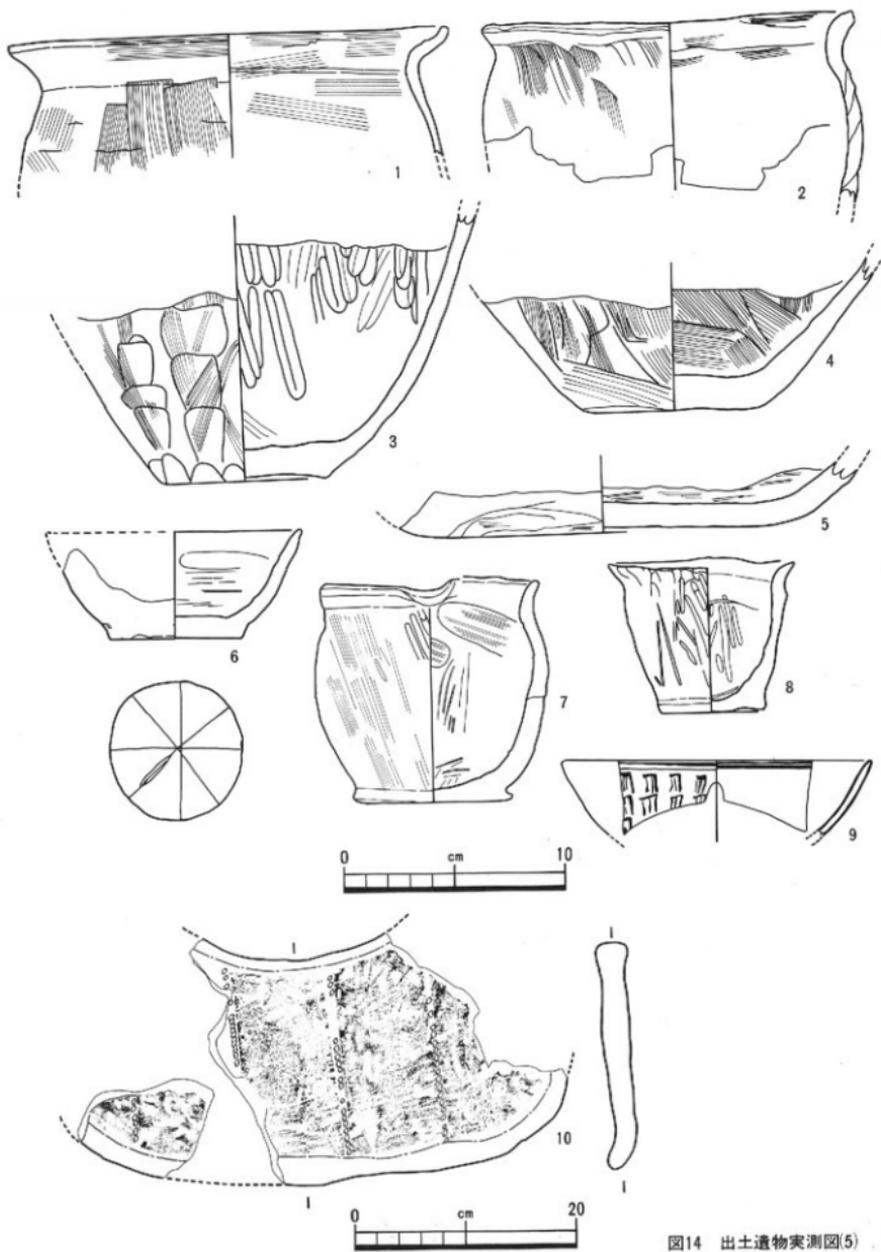


图14 出土遗物实测图(5)

いる。台から上は欠損して無いが全面朱塗りで外面に削りによる文様を施した例(写真4-⑥、図10-3)も存在する。

片口浅鉢形 片口部の破片が1点だけ出土(図11-5)している。

壺形 壺形では口径23cmを計る大型の壺が1点出土している(写真4-②、図11-1)。口縁に突起帯を有し外面はきれいに研磨された状態になっている。また朱塗りの壺としては口縁部が欠損するものの最大幅21cm残存器高16cmを計る算盤皿の形状のものが見られ(写真4-③、図10-6)、スクリーントーン部分は朱塗りの痕跡が明瞭に残る部分である。粗製の壺としては図11-4で示した器高15cm幅13cmのものや、図10-8で示した器高9cmという小型のものが見られる。前者と同タイプの壺の出土例が多い。

皿形 皿形では全面朱塗りで形状が楕円形を呈するものが2点出土している、口縁に大洞C2式特有の突起を有し、胴部外面には磨消縄文による雲形文が充填している例(写真4-④、図10-1)と鮮やかな朱彩が残っている例(写真5-①、図10-7)があり、前者は長径24.5cm短径21.5cm器高8cmを計り、後者は推定長径28cmを計る。どちらもSX07からの出土であり、楕円形の皿形としては優品の部類に入るだろう。また円形の皿としては、図10-4をはじめとする口径20cm前後の例が数点存在し、いずれも朱塗りの精製土器である。

碗形 碗形としては朱塗りの粘土が精製された白色を呈する例(写真5-②、図10-5)と黒色で表面が研磨した状態の例(写真5-③、図10-2)があり、両方外面胴部から底部にかけて磨消縄文による雲形文を充填しているが、他には単に沈線だけが認められる破片も存在する。

注口形 注口土器の注口部(おそらく大洞C1時期と推定)と、大洞C2式期に特有の胴部張りだし部に降帯を有する破片(図11-11)が存在する。

香炉形 透かし彫りで文様を有し、朱塗りの痕跡

が残る破片が1点存在する。

他に、北海道系と推定される破片(図11-6・7・9)と岩手県の九年橋遺跡に見られる破片(図11-10)があるので図示しておく。

2) 石器・石製品など

石器の中で最も多いのは石鏃であり9点、有柄石鏃(図12-1、2、3、4、5、6、7、8)と無柄石鏃(図12-9)が存在する。右錐(図12-12)は1点、石匙は4点で縦形(図12-13)と横形(図12-14、15、16)がある。石筥は2点(図12-17、18)である。図12-10は石鏃状の形態であり、図12-11は異形で用途は特定できない。

磨製石器には、石棒(図13-2)、石剣(図13-3、4)、石斧(図13-5)があり、石棒・石剣共に全体形はわからない。

他に凹石(図13-10)、円盤状石製品(図13-11、12)があり、石皿(図13-13)は朱塗り原料の付着(図のスクリーントーン部分)が認められる。ヒスイ玉(図13-8)は1点だけの出土である。人為的製品かどうか判断しかねる製品として、岩偶状の製品(図13-1)、有孔石製品(図13-6、7)がある。参考のため表1 石器・石製品等計測表を載せておく。

B) 平安時代の遺物

平安時代の遺物はほぼ竈穴住居跡との関連から白頭山苦小牧火山灰以前の製品と見られるものが多く、9世紀代を中心とした年代観を推定できる。器種としては、土師器、須恵器、土製品があり、以下概述する。

1) 土師器

器形としては甕形、塙形、塚形、小型甕形が存在する。

SI03のかまどから出土した甕形には、口縁部が外に強く張り出し内外面はナデによる調整をおこなっている破片(写真3-⑥)と外面は削りとナデによる調整、内面はナデと棒状の用具で沈線状に縦位の調整をする底部破片(図14-3、写真

3-④)があり、底径15cmを計る端の破片(図14-5、写真3-⑤)も共伴している。

S I 02のかまどから出土した甕は口縁の外反がやや内湾気味の立ち上りを呈し篋状工具によるナデの痕跡が明瞭なもの(図14-1)と同じ調整ながら口縁が肉厚で巻き上げの痕跡が明瞭に残るもの(図14-2)があり、若干片口状になった小型甕形(図14-7、写真3-⑨)も共伴している。また、S I 02の覆土(床面に近い)から小型甕形(図14-8、写真3-⑧)が完形で倒立した状況で出土している。この土師器は内外面を棒状の工具で調整しており、ミガキに近い部分も存在する。

杯(図14-6、写真3-⑦)はS X 02覆土出土の1点だけ提示している。内外面はミガキによる調整をしており、底には刻線によって八分割状のマークが施されている。

2) 須恵器

すべて壺形の破片で4点ほど出土し、器面観察では当地の窯で焼かれたもの以外と推定される。

3) 土製品

S I 02の床面直上からは、全体で50cm以上になると推定される盤状土製品(図14-10、写真5-④)が出土している。この製品は表面にむしろ状の圧痕を有し、裏面は火を受けたように器壁がただれている。胎土には土師器の土と共にスサのような植物質の繊維が混入している。

V 調査成果のまとめ

調査成果のまとめを列挙すると、

1 調査対象区の全域に縄文晩期の遺構・遺物が分布する可能性がある。特に調査区の東側では地山までの層位が薄いのにに対し、西側は20から50cm以上の堆積層が認められ、重機による擾乱も少ない。

2 縄文時代の遺構としてはS X 07という遺物廃棄土坑がよく残っており、F 6区やF 7区から検出されたS S 01集石遺構は周辺から多様な石器も

出土しており注意を要する。I 8区・J 8区から検出した柱穴は縄文時代の住居跡の痕跡とも推定されることから調査区を拡大して精査する必要がある。

3 縄文時代の遺物としては、土器・石器共に縄文晩期・亀ヶ岡式文化を象徴する遺物群であり、従来まで各所に紹介されてきた羽黒平遺跡の遺物と同種であることを確認できた。ただし、従来の泥炭地から出土した遺物より本調査区の方が一型式新しいと考えられることから、遺跡の広がり、本調査区以外にも広がりをも有すると推定される。特に浪岡川を狭んで対岸にある源常平遺跡との関係は時期差や集落構成の面から今後追求する課題である。

4 平安時代の住居跡が三軒検出されたことは、隣接する羽黒平(1)遺跡や平野遺跡さらには松山遺跡との関係で、集落の広がりを想定できる。また住居跡の位置もほぼ磁北に対して一定の配置を有し、今後更に住居跡が発見される可能性が高い。時期的には火山灰との関係から9世紀代を中心とする時期を想定でき、今回出土した土師器にロクロを使用した痕跡が無いことに注目したい。

5 中国製の染付碗の破片が1点出土していることから、本調査区及び周辺に16世紀頃の遺跡が存在したものと推定される。現況では、羽黒神社の丘陵部は美人川とされる沢筋で区切られ、あたかも中世の館跡のようにも見える。

以上のように、本試掘調査によって明らかになった歴史事実は、浪岡町の原始・古代・中世の生活を考える上で貴重な資料提示ができたと考えられる。最後に、炎天下の調査にあたって終始飲み水の供給や休憩地を提供してくれた隣地の山印造園には衷心より感謝申し上げる次第である。

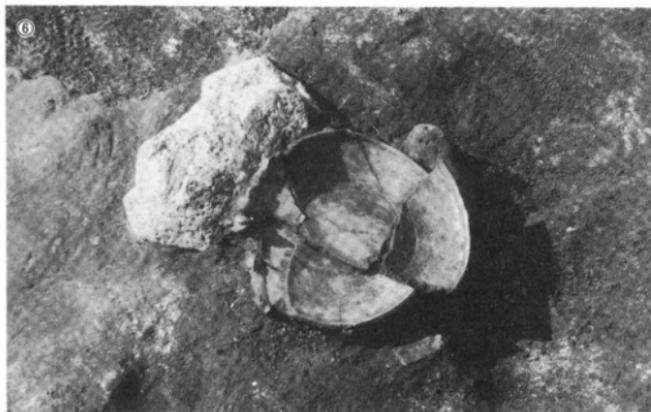
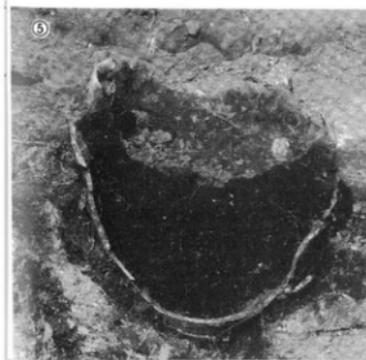
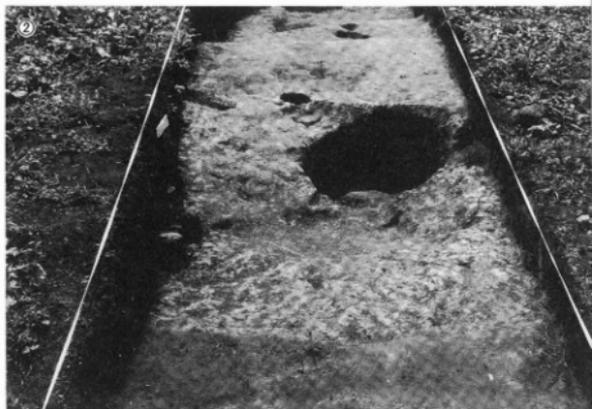


写真1 ①発掘調査区から天狗平(南側)を眺む ②S X 07全景
③S S 01全景 ④・⑤埋設土器(S X 06)検出状況
⑥S X 07覆土下層出土朱塗り皿型土器出土状況(表紙写真)

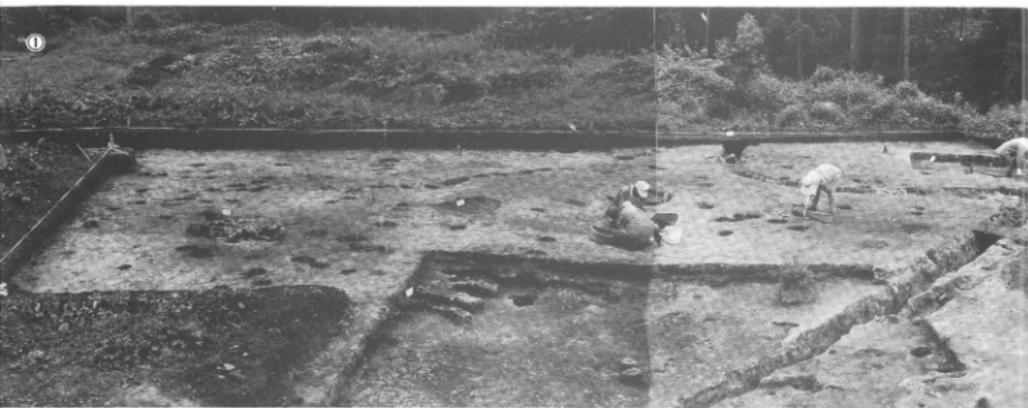


写真2 ①1・J8区遺構検出状況(西側から)
 ②S102全景(北側から) ③S102かまど完掘状況
 ④SD04完掘状況 ⑤S102床面出土蟹状土製品

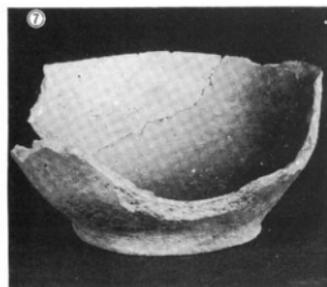
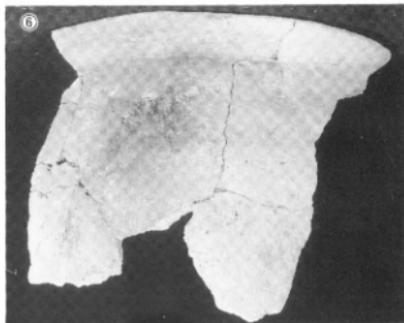
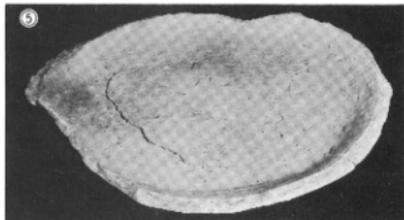
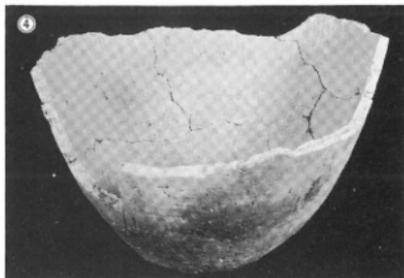


写真3 ①S 103全景(北側から) ②S 103かまど全景 ③S X02全景(北側から)
④S 103かまど出土壺 ⑤S 103かまど出土埴 ⑥S 103かまど出土壺
⑦S X02覆土出土坏 ⑧S 102覆土出土小型変形土器 ⑨S 102かまど出土小型変形土器

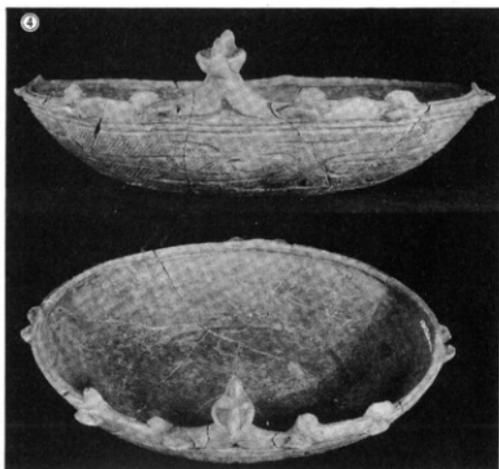
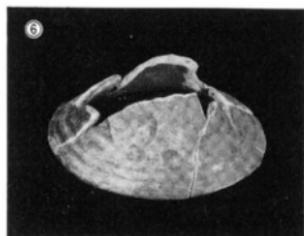
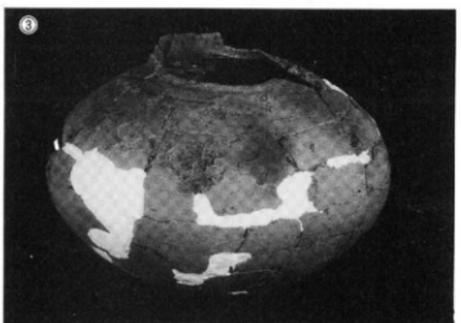
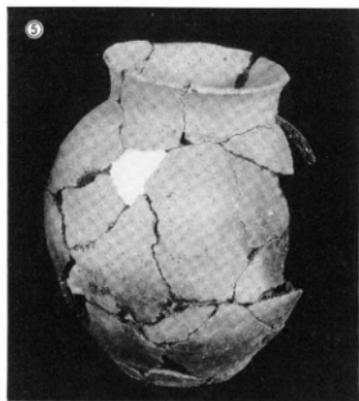
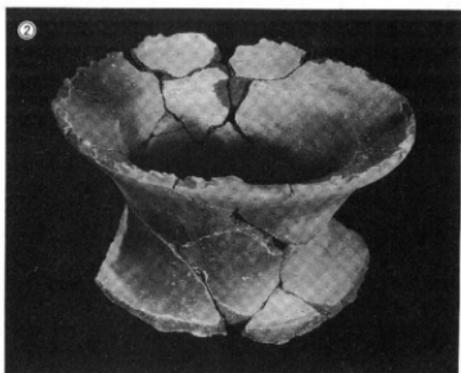
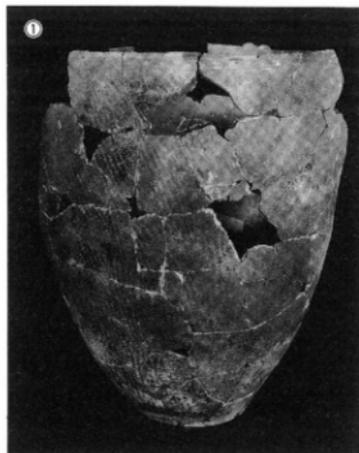


写真 4

①H 8区S X 06出土埋設土器 ②H 7区S X 07覆土上層出土壺形土器 ③H 7区S X 07覆土出土朱塗り壺形土器
④H 7区S X 07覆土下層出土朱塗り皿形土器 ⑤H 7区S X 07覆土出土壺形土器 ⑥H 7区S X 07覆土出土朱塗り台付土器

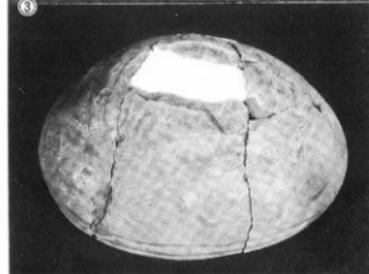
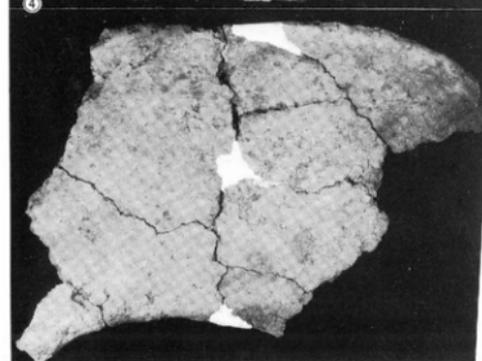
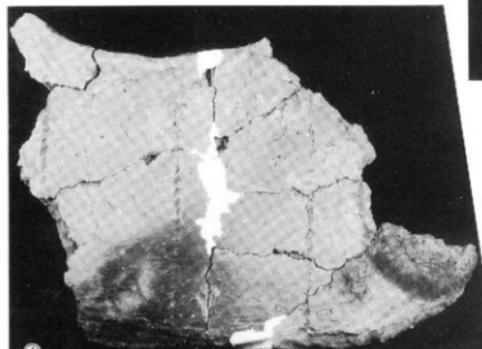
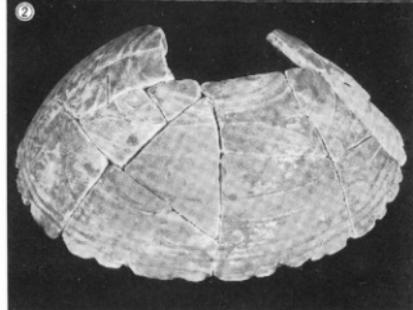
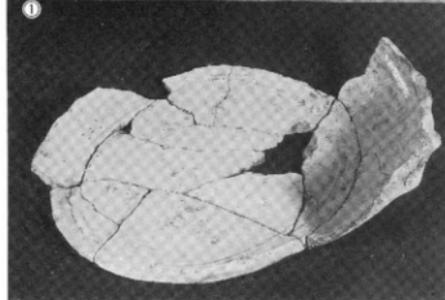
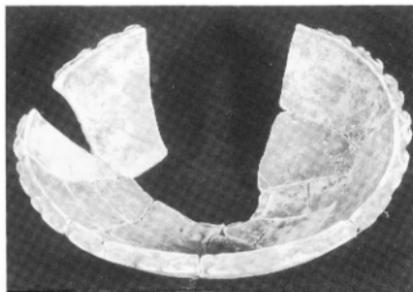


写真 5 ①H7区S X07覆土出土朱塗り皿形土器
 ②H7区S X07覆土出土朱塗り碗形土器
 ③H7区S X07覆土出土碗形土器
 ④S102床面直上出土盤状土製品

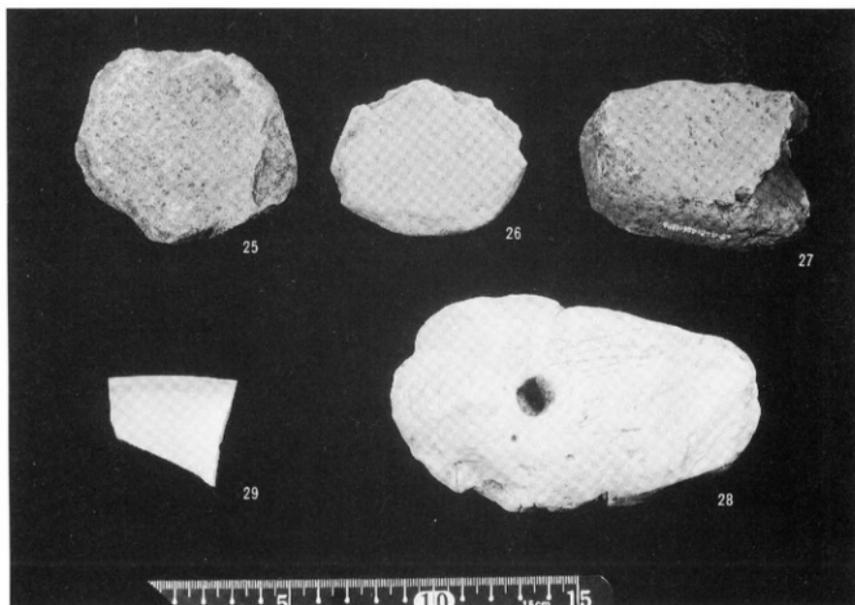
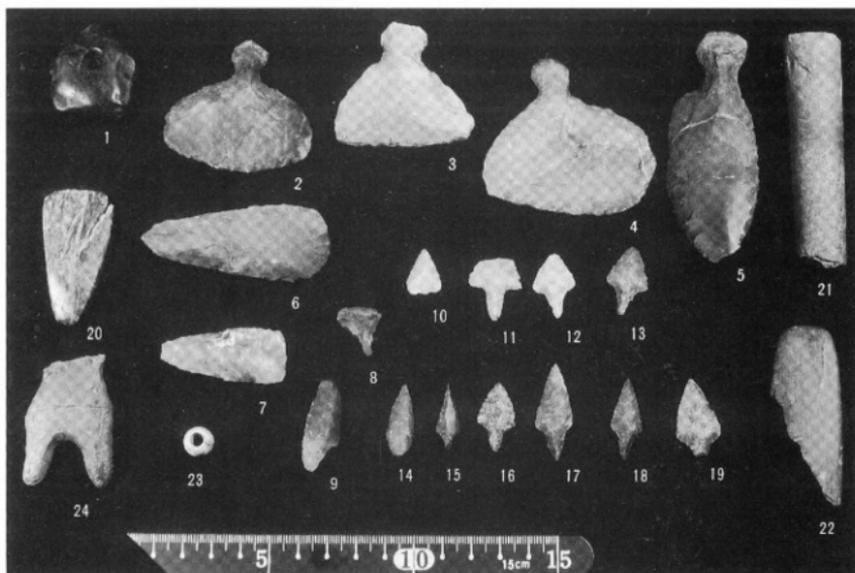


写真6 1. 有孔石製品 2~5. 石匙 6・7. 石篋 8. 石錐 9. 不明石製品
 10~19. 石鏃 20. 磨製小型石斧 21. 石棒 22. 石剣
 23. ヒスイ玉 24. 土偶 25・26. 円盤状石製品 27. 凹石
 28. 岩偶? 29. 中国製染付碗

表1 石器・石製品等計測表

名称	出土地	遺物No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石質	特徴	図番号	写真番号
石 鏃	I 8区II層	S19	2.70	1.53	0.68	頁岩		12-1	6-13
石 鏃	I 8区II層	S11	2.98	1.18	0.45	頁岩		12-2	6-18
石 鏃	S X02覆土	S28	2.40	0.90	0.36	頁岩		12-3	6-15
石 鏃	I 8区II層	S17	(2.29)	1.92	0.42	頁岩	先端欠損	12-4	6-11
石 鏃	I 8区II層	S18	3.53	1.32	0.58	頁岩		12-5	6-17
石 鏃	G 8区I層	S 2	3.02	1.65	0.47	?		12-6	6-19
石 鏃	F 7区II層	S10	(2.41)	1.53	0.53	頁岩	先端欠損	12-7	6-12
石 鏃	H 7区II層	S23	2.51	1.34	0.37	頁岩		12-8	6-16
石 鏃	D 8区I層	S26	1.76	1.27	0.39	玉髓?		12-9	6-10
石 鏃	? F 7区II層	S27	2.68	1.00	0.50	頁岩		12-10	6-14
?	F 7区II層	-	3.45	1.29	0.80	頁岩		12-11	6-9
石 鏃	F 7区II層	S12	(1.82)	1.60	0.25	頁岩		12-12	6-8
石 匙	J 8区柱穴覆土	S34	8.95	3.28	1.33	頁岩		12-13	6-5
石 匙	H 6区II層	-	4.60	5.14	1.29	頁岩		12-14	6-3
石 匙	F 7区II層	S30	5.83	6.41	1.32	頁岩		12-15	6-4
石 匙	H 7区II層	S21	5.36	5.45	1.14	頁岩	アスファルト付着	12-16	6-2
石 鏃	F 7区II層	-	4.46	2.06	0.84	玉髓?		12-17	6-7
石 鏃	F 6区S S01覆土	S31	6.83	2.78	1.10	頁岩		12-18	6-6
岩 偶	? F 9区S D02覆土	S 6	13.40	7.90	3.87	砂岩		13-1	6-28
石 棒	D 8区S D06覆土	S33	(8.97)	2.80	3.87	粘板岩	磨製	13-2	6-21
石 剣	H 7区II層	S22	(6.50)	2.61	0.80	粘板岩	磨製	13-3	6-22
石 剣	G 8区I層	S 1	(9.26)	2.81	(0.63)	粘板岩	磨製	13-4	
石 斧	H 7区II層	S25	5.10	2.56	0.80	緑色凝灰岩	磨製	13-5	6-20
有孔石製品	F 7区I層	S 5	3.75	3.20	1.45	?		13-6	6-1
有孔石製品	F 8区I層	S 3	(2.62)	3.53	0.70	頁岩		13-7	
玉	F 7区II層	S 9	1.02	1.04	0.78	ヒスイ		13-8	6-23
土 偶	G10区S X02覆土	P59	(4.68)	3.10	1.37	-		13-9	6-24
凹 石	F 9区S D02覆土	S 7	(8.50)	6.24	2.85	凝灰岩		13-10	6-27
円盤状石製品	H 7区II層	S24	7.10	6.01	1.16	凝灰岩		13-11	6-26
円盤状石製品	F 8区I層	S 4	8.25	7.14	2.43	凝灰岩		13-12	6-25
石 皿	F 6区S S01覆土	S32	(9.75)	19.32	9.30	凝灰岩		13-13	

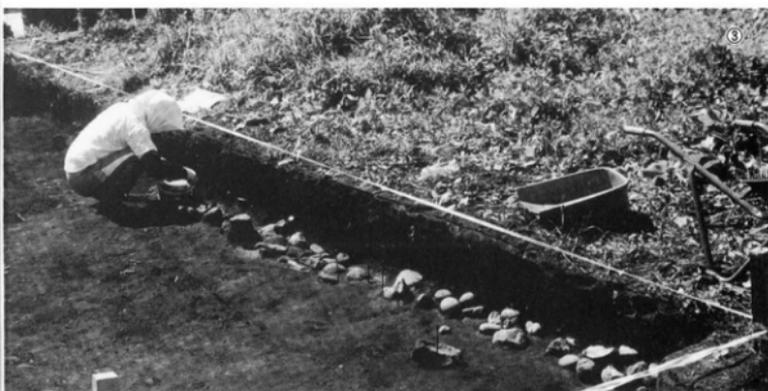


写真7
発掘の状況(1)

① S 102

② S 103・SD04

③ S S01

①



②

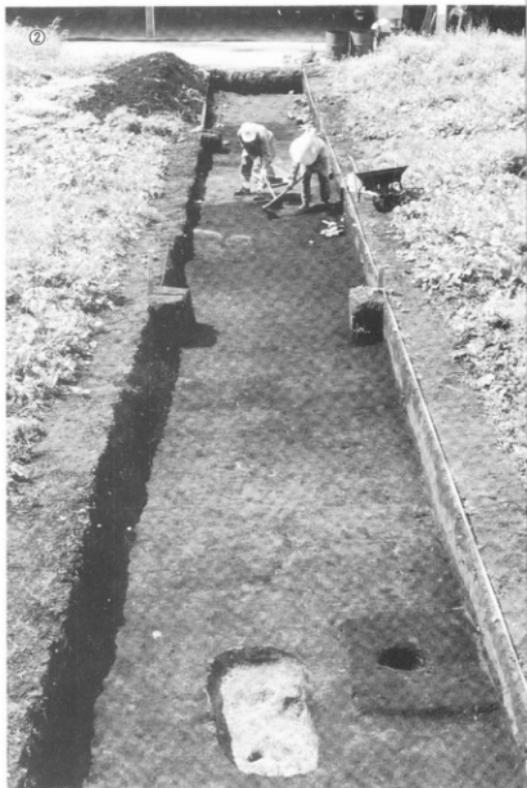


写真8 発掘の状況/2

①羽黒神社と楊枝杉を眺む

②F-6・7・8区

③発掘参加者





浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第5集

羽黒平(3)遺跡発掘〔試掘〕調査報告書

平成 7 年 3 月 31 日 発行
発行 浪 岡 町

038-13 南津軽郡浪岡町大字浪岡字植村101-1
T E L (0172)62-1111

印刷 高金印刷株式会社
038 青森市千刈二丁目1の31
T E L (0177)81-0519・2244
